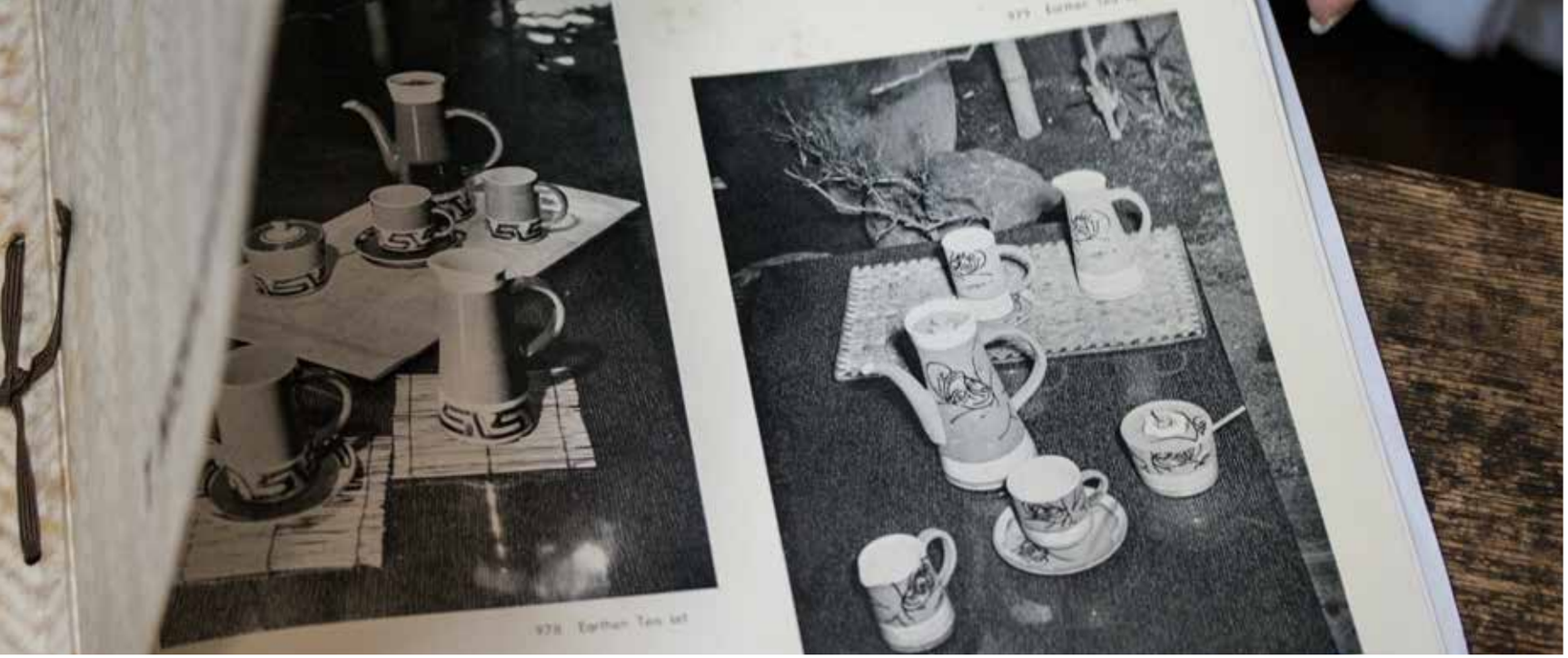
# 伝統の京焼・清水焼を世界へ輸出 - 西川貞三郎商店

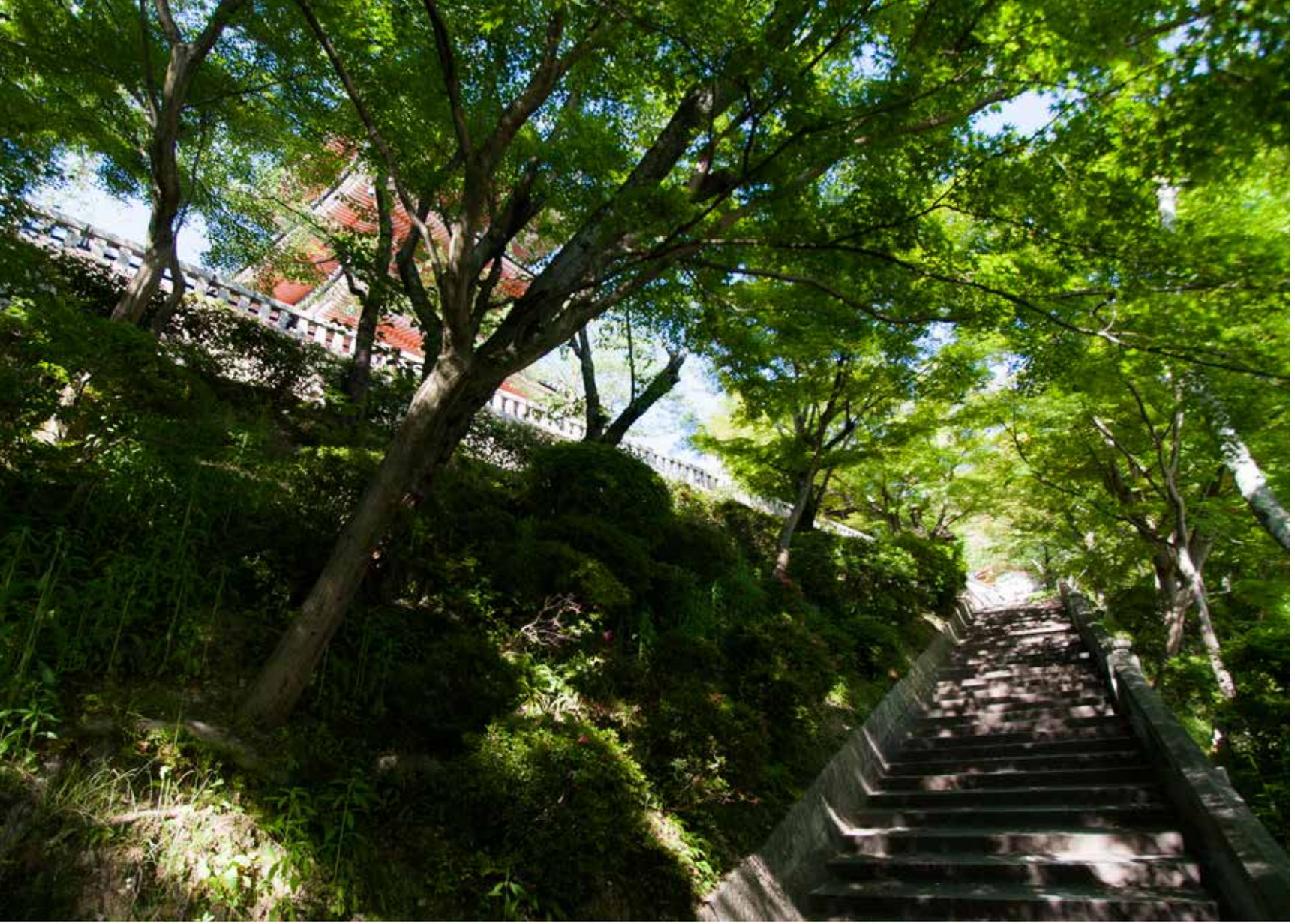
大正 6 年（1917）創業の西川貞三郎商店（上は大正頃の写真）。西川貞三郎氏は大正 10 年頃から、単身でシベリアや中国の各都市、南洋諸国に渡り、清水焼や生活用品の販路拡大に努めたそうです。その功績から、全国中小貿易業京都連盟の初代会長ともなりました。その後、欧米各国の見本市にも出展し、岩手の鉄器メーカーの協力を得て色鮮やかな南部鉄器などを開発。京都伝統工芸品輸出の草分けのひとりともいえる人物です。創業当時から続く町家造りの店舗は、清水寺の参道に続く五条通を少し入った所にあります。



4 代目社長の西川加余子さんに、欧米輸出向けのカタログを見せて頂きました。戦前は韓国・満州・中国との大陸貿易が盛んで、終戦直後はアメリカの日本人街へ清水焼を出荷、昭和 30 年代～ 60 年代は、ヨーロッパ向けの花瓶やティーセットの輸出を行なっていたようです。西洋の暮らしに合わせ、様々な製品開発を行なっていたことがカタログからうかがえます。清水焼の製造工程も解説されていました。

アメリカ向けの花入れには「 Made in Occupied Japan 」（1947 ～ 1952 年占領下の日本製品を示す）の刻印がありました。

清水焼の絵付け師歴 30 年・桝本さんの仕事を拝見しました。お皿一面の桜に紅葉（もみじ）をあしらった雲錦詰の絵柄です。「桜の姿を重ねずに、まんべんなく描くのが難しい」と桝本さん。皿の表裏、高台の中やフチにまで絵柄を描き詰めるのが特徴で、京都の「底至り」（表に出ないところまで念入りにできていること）を象徴する作品といえます。桜に紅葉を入れるのは、四季を通じて使えるようにする工夫とのこと。



大勢の観光客で賑わう新緑の清水寺。清水焼は清水寺の参道である五条坂界隈で発祥したといわれ、境内をいろどる桜や紅葉、梅などをはじめ、仏教にまつわる柄や伝統的な文様を写しとってきました。

桝本さんの描いた見事な雲錦詰。湯のみ茶碗には、梅、桜、牡丹、菊、紅葉と四季おりおりの花が揃います。分業制の進んだ清水焼で、これだけ様々な絵柄を描ける方は少ないそうです。顔料の「呉須(ごす)」は窯元によって配合が異なり、器の雰囲気を大きく左右します。面相筆にはイタチの毛を使います。

全国から様々なものが集散した京都には、各地の窯業産地から多種多様な職人や技法、陶土などが集まり、清水焼の多様性は、こうした歴史のなかで培われました。その特徴を一言でいうと「京都の皇族、貴族趣味を反映した薄く軽いつくりと、細部にまで徹底した仕事ぶりではないか」と西川貞三郎商店の土屋さんはいいます。

上は清水焼と同じ技法でガラスに絵付けした製品。左は古くから西川家で使っていた器の絵柄を復刻し、海外向けに開発した製品。

西川加余子さんは祖父や父の遺志をつぎ、フランスをはじめヨーロッパ諸国、中近東、北アメリカ、オーストラリアなど世界各国への輸出を続けています。Ambiente(フランクフルト)など海外見本市にも出展し、清水焼の魅力を世界に発信することで産地に貢献したいといいます。